鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第43号，67－86　2013

こども学フィールドワークⅡの授業実践報告　第8報

森木　朋佳，伊瀬知裕子，鶴巻　保子

A Report on Putting Classwork into Practice,“Child Studies; Field Work Ⅱ”

Tomoka Moriki, Yuko Isechi and Yasuko Tsurumaki

こども学フィールドワークⅡは，保育者としての体験的な学びを重視した演習科目の一つである。学生が学内・学外で実施される子育て支援講座等に指導補助員として参加することをとおして，子どもやその家族と関わり，実際の子どもの姿や親を含めた子どもをとりまく環境について理解を深めることを目的としている。平成23年度は，学内では「純心こども講座」で，学外では「国立大隅青少年自然の家」あるいは「生命と環境の学習館」において実習を行った。実習後には，学生一人ひとりが自分の取組みについて振り返る機会を設けた。学生の自己評価からは，学内外における実習が，学生たちにとって「子どもの姿を知る」機会として生かされたことが示されるとともに，「子どもや保護者との関わり」「記録に対する意識（における個人差)」が実習後の自己課題として示された。

Key Words:〔体験的学び〕〔子どもや親との関わり〕〔振り返り〕〔自己評価〕〔実践力〕

(Received September 24, 2012)

はじめに

鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻は，平成14（2002）年に保育士養成課程としてスタートした。平成16（2004）年には幼稚園教諭二種免許の課程認定を受け，幼稚園教諭と保育士資格の取得が可能となり，いわゆる「保育者」の養成に取組んでいる。こども学専攻開設以来,「こども学フィールドワーク」を1年次の通年科目として開講してきた。こども学フィールドワークは，学生の主体的・体験的学びを重視した授業で，平成14（2002）年から平成21(2009）年まではこども学フィールドワークⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（演習；各1単位）として展開してきた。平成22(2010)年には,こども学専攻の収容定員増加申請に伴うカリキュラム変更を受け,こども学フィールドワークⅠ～Ⅳを再編し，こども学フィールドワークⅠ･Ⅱ（演習;各2単位）として再スタートした。具体的には，これまでのこども学フィールドワークⅠとⅡをこども学フィールドワークⅡに，これまでこども学フィールドワークⅢとⅣをこども学フィールドワークⅠと位置づけた。

現行のこども学フィールドワークⅠでは,「観る・聴く」をとおして「子ども観」を広げる

＊鹿児島純心女子短期大学生活学科子ども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

ことを目的としており,「チャイルドウォッチング」と「外部講師（子どもに関する専門職の方）による講話」によって構成されている。一方,こども学フィールドワークⅡは,学内外での「体験的学び」をとおして，子どもやその親を含めた子どもを取り巻く環境について理解を深めることを目的としている。

本稿は，平成23年度に実施したこども学フィールドワークⅡについて授業の実施状況について報告するとともに，授業実践の成果と今後の課題について報告するものである[1)]。

Ⅰ　こども学フィールドワークⅡについて

こども学フィールドワークⅡ（演習2単位）は，昨今の保育者を目指す学生であっても子どもと直接関わる経験が少ないという現状を受け，子どもやその親と直接関わる機会をとおし，実際の子どもの姿を知るとともに，子どもと関わる上で必要な知識や技能について学ぶことを目的としている。授業は，学内実習と学外実習で構成され，学生は学内外で実施される子どもやその親を対象とした体験学習講座等で実習を行っている。

学内実習では，鹿児島純心女子短期大学「江角学びの交流センターこどもの未来支援室」が主催する「純心こども講座」において，学生が指導補助員の立場で実習する。指導補助員の役割は,「純心こども講座」の企画・準備・運営・反省の一連の流れを経験することが求められ，最終的には，学生の力で「純心こども講座」の企画から当日の運営までを行っている。

学外実習では，国立大隅青少年自然の家，生命と環境の学習館などで行われている，子どもやその家族を対象とした講座でのボランティア体験を行う。これらの場でボランティアとして活動するために，学生は「ボランティア養成研修」などの事前（基礎）研修に参加した上で，当日の講座に臨む。

Ⅱ　平成23年度授業実施内容の報告

平成22（2010）年度入学生からはこども学専攻の定員が55名となった。平成23年度のこども学フィールドワークⅡは，伊瀬知･森木･奥村･鶴巻の4名が担当し，伊瀬知･森木が学内実習を，奥村・鶴巻が主に学外実習を担当した。

1　学内実習について

1）目的

学内実習では,「純心こども講座」の企画・準備・運営・反省の流れを経験することで，日常的には子どもと関わる機会を持たない学生たちが子どもやその親と直接関わる機会を持つとともに，子どもやその親への理解を深め，将来の保育者として必要な知識や技能を身につけて欲しいと考えている。図1に学生に提示した学内実習の目的を示す。

2）実施方法

⑴　授業の流れ

こども学フィールドワークⅡの授業は，全体での活動とグループ別での活動を組合せ

て実施した。すなわち，「オリエンテーション（全体）→『純心こども講座』での実習（グループ）→まとめ（全体・個人)」の枠組みで展開した。学生は，全体でのオリエンテーションを受けた後,「リズムあそび」もしくは「いろとあそぼう･かたちとあそぼう」のいずれか１種類の講座に，一人４回指導補助員として参加した。図2は，学生に提示した学内実習の流れである。

2　こども学フィールドワークⅡ（学内実習）の目的

実習の場である「こども講座」を実施するにあたって必要な「企画・運営・反省」の流れを経験することが，この授業の最大の目的です。

実習をとおして，次の力を育てましょう。

- **企画を実現する力**
- **子どもやその親と関わる力**
- **講座の内容を振り返り，改善していく力**

図１　学内実習の目的[2)]

3　こども学フィールドワークⅡの流れ

こども学フィールドワークⅡの大まかな流れは次のとおりです。

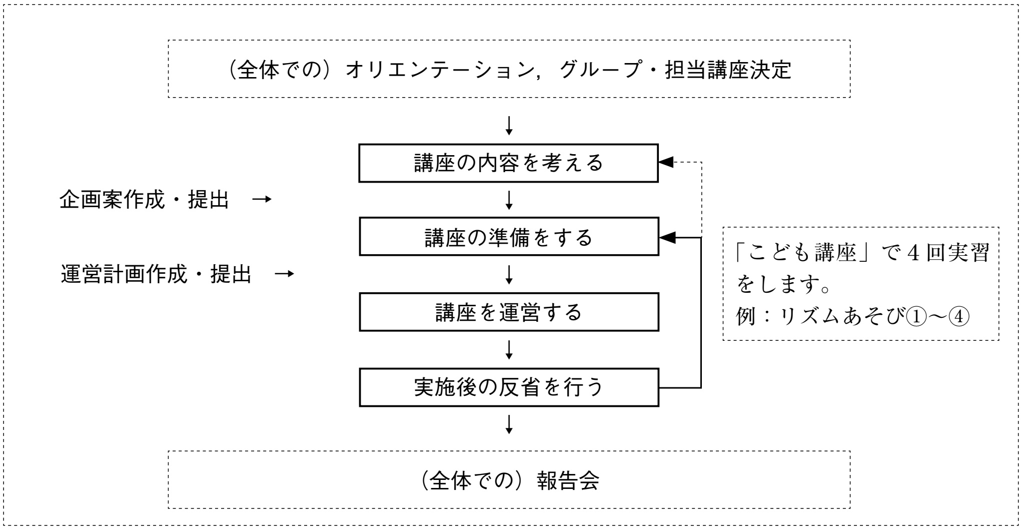

図２　学内実習の授業の流れ[3)]

⑵　指導体制と組織

入学生の増加に伴い，これまでの授業の枠組みを利用しながらも，「純心こども講座」の場において学生が主体的に学ぶことができるよう指導体制と学生の組織を一部変更した。主な変更内容は以下のとおりである。

ア　1講座あたりの学生数（例えば「リズムあそび」を担当する学生の人数）は，これまでの25名程度を30名程度とした。また，30名程度をさらに15名程度の小グループ2

つに分け，2つのグループで1つの講座を担当するという方法をとった。図3は，「リズムあそび」を例にグループ編成の方法について示したものである。「いろとあそぼう・かたちとあそぼう」も同様にグループ編成を行った。15名程度の小グループ制を採用することで，学生数が増加しても，学生同士の連携がスムーズに行われるようにした。

イ　講座の準備・運営に必要な係として，「講座係」「会場係」「参加賞・名札係」の3つを学生に提示した。「講座係」は，主になって「純心こども講座」の企画・運営を担当し，「会場係」と「参加賞・名札係」は，「講座係」の企画を受け，会場の環境構成や参加賞の企画・作成を行うようにした。図4は，指導体制と学生の組織を示したものである。学生は教員と連絡を取り合いながらも，主体的に各係を分担し，講座の準備と当日の各々の役割に取組んだ。

これまで，2グループ制による実践を行った場合に起こる傾向として，グループ間に主－従の関係が生じることを報告してきた。そこで，予め主となる「講座係」，サブ的な役割を果たす「会場係」と「参加賞・名札係」として提示し，毎講座役割を交替することで，学生が双方の役割を経験できるようにした。

ウ　「純心こども講座」の準備や講師との打合せの時間が持てるよう，授業時間（時間割）内にこども学フィールドワークⅡの時間を可能な限り多く組み込んだ[4)]。授業時間の確保にあたっては，可能な限り「純心こども講座」が開講される週に設定した。

イで述べたように役割分担を明確にすると，学生は，小グループでの活動に重点をおきがちになり，「2グループで1つの講座を担当する」という意識が生まれにくい。そこで，授業時間内に双方のグループが集まり，進捗状況を確認しあったり，情報交換を行ったりできる時間を確保するようにした。

エ　週ごとに目標もしくは実行すべき事柄を示した予定表を学生に提示した。

予定表には，「企画案提出」，「リハーサル」「講座準備」等のほかに，行事や授業の予定を記載し，指導教員が指示しなくても，学生たちが「いつまでに」「何をするか（すべきか）」の見通しを持てるようにした。

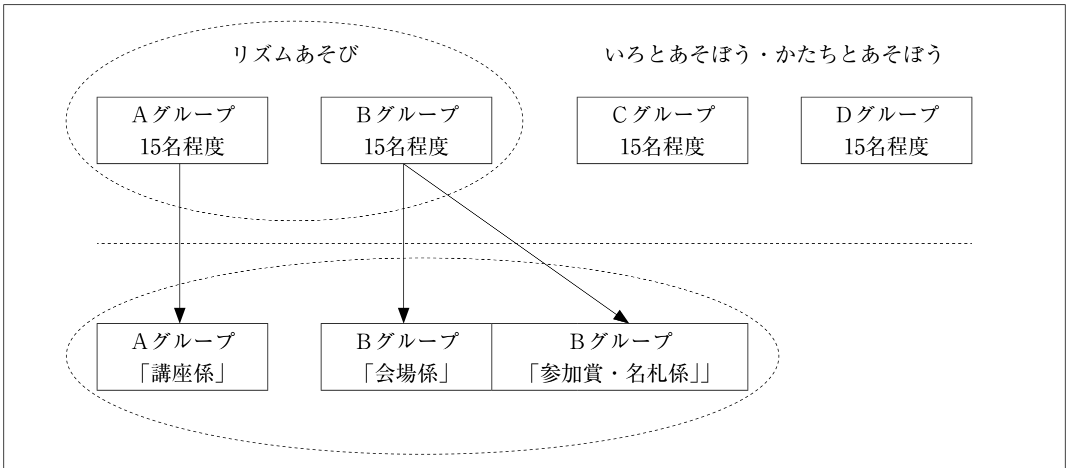

図3　学内実習グループ編成の方法（イメージ）

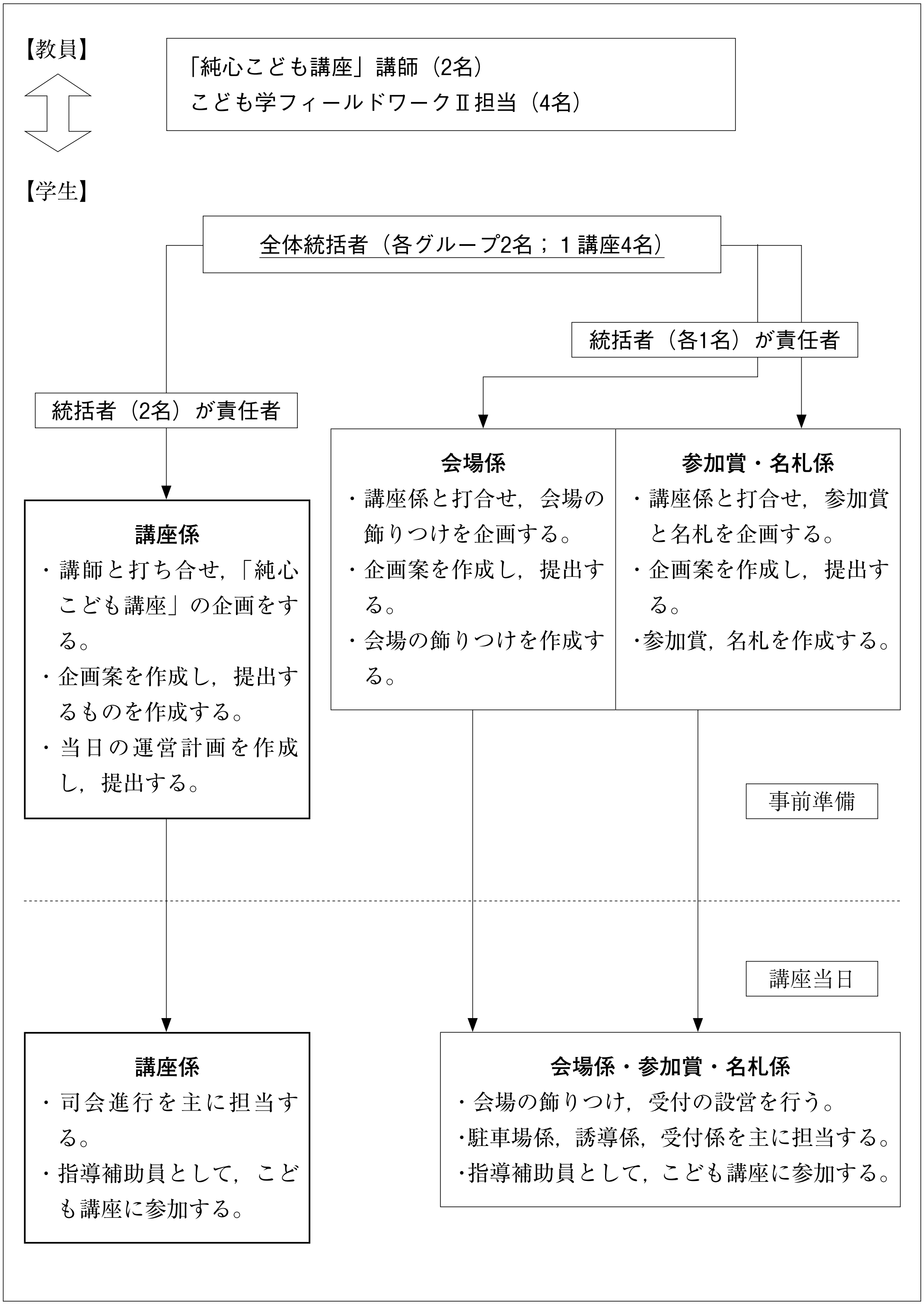

図4　指導体制と学生の組織（学内実習）

3）授業の実施状況

平成23年度の授業実施状況を表1に示す。

表1　平成23年度の授業実施状況（学内実習）

	内　　　　容	時間数（分）	実施日	時間	実施形態
時間割内	全体オリエンテーション（こども学フィールドワークⅠ～Ⅳ合同）	90	4／7	16：30～18：00	全体
	こども学フィールドワークⅡオリエンテーション・担当講座決定	90	4／21	16：30～18：00	全体
	講座準備・講師との打ち合わせ・リハーサル等	90	5／12	16：30～18：00	全体 グループ
	講座準備・講師との打ち合わせ・リハーサル等	90	6／16	16：30～18：00	全体 グループ
	講座準備・講師との打ち合わせ・リハーサル等	90	6／23	16：30～18：00	全体 グループ
	講座準備・講師との打ち合わせ・リハーサル等	90	6／30	16：30～18：00	全体 グループ
	講座準備・講師との打ち合わせ・リハーサル等	90	7／7	16：30～18：00	全体 グループ
	まとめ（Moodleでの入力など）	90	1／19	16：30～18：00	全体
時間割外	純心こども講座（リズムあそび①）	270	5／14	8：30～13：00	グループ
	純心こども講座（いろとあそぼう･かたちとあそぼう①）	270	5／21	8：30～13：00	グループ
	純心こども講座（リズムあそび②）	270	6／18	8：30～13：00	グループ
	純心こども講座（いろとあそぼう･かたちとあそぼう②）	270	6／25	8：30～13：00	グループ
	純心こども講座（リズムあそび③）	270	7／9	8：30～13：00	グループ
	純心こども講座（いろとあそぼう･かたちとあそぼう③）	270	7／16	8：30～13：00	グループ
	純心こども講座（リズムあそび④）	270	8／6	8：30～13：00	グループ
	純心こども講座（いろとあそぼう･かたちとあそぼう④）	270	10／1	8：30～13：00	グループ

2　学外実習について

1）目的

学外実習では，各施設が主催するイベントに参加することをとおして，地域における子どもの実態に触れるとともに，教育プログラムや子育て支援のあり方について学び，現在そして将来にわたって地域貢献できる力を身につけて欲しいと考えている。

図5は，学生に提示した学外実習の目的（ねらい）である。

1．学外実習（ボランティア）のねらい

①施設の主旨,役割を理解し,施設の実施するイベントの宿泊ボランティアやワークショップのサポーターとして体験します。

②地域における子どもと教育プログラムや子育て支援のあり方，実態を学び，地域貢献をします。

③子どもとその親，家族との交流をとおして，子どもたちに豊かな社会性が育まれるよう支援します。

図５　学外実習のねらい[5)]

2）実施方法

⑴　授業の流れ

学外実習における授業は,「オリエンテーション→『学外ボランティア実習』（グループ）→まとめ（全体・個人）」の流れで展開した。学生は，全体でのオリエンテーションを受けた後,「国立大隅青少年自然の家」もしくは「生命と環境の学習館」のいずれか1つの施設を選択し，それぞれの施設が開催する「ボランティア養成研修」で事前学習を行い，後日，実際に各施設主催のイベントにボランティア（サポーター）として参加した。学外実習の授業の流れは，図6のように図式化できる。

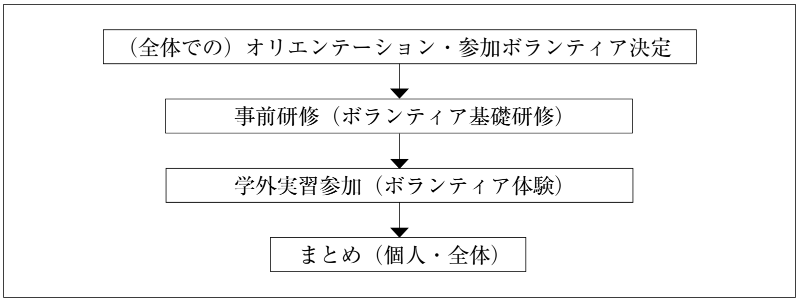

図6　学外実習の授業の流れ

⑵　指導体制と授業の実施状況

学外実習における，学生への指導体制は以下のように表すことができる。

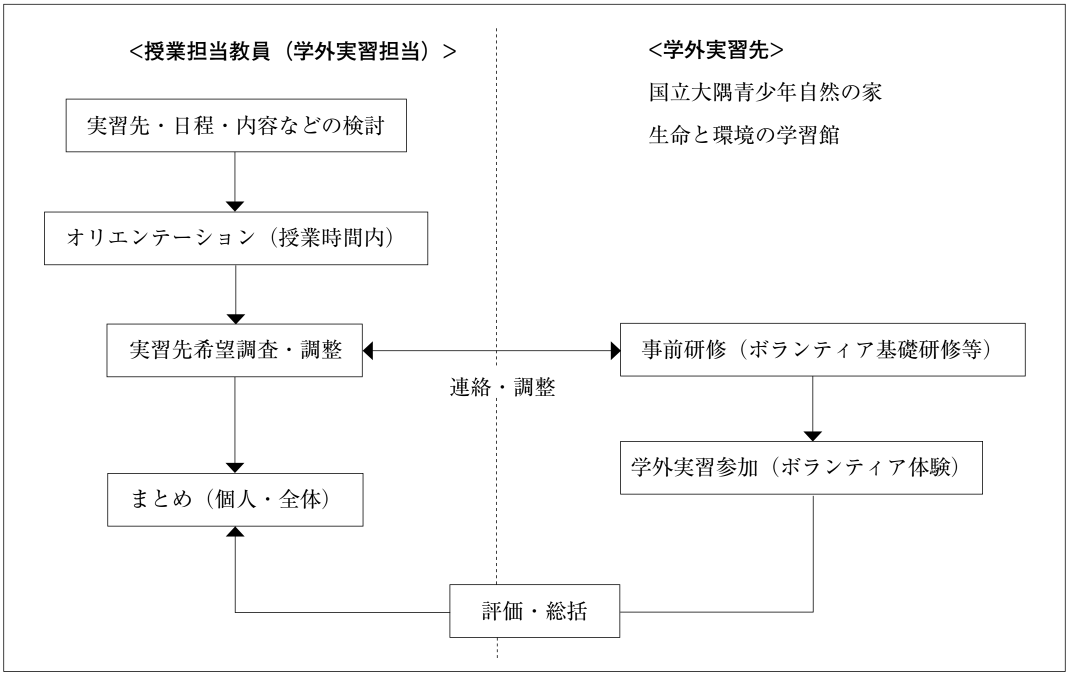

図7　学生への指導体制（学外実習）

図7のように，教員は全体でのオリエンテーション，学生の割り振り，実習施設側との連絡・調整を行うとともに，学外ボランティア実習を行うために必要な手続きを行った。また，学生には一人ひとりに「学外ボランティアノート」を配布し，事前研修の内容，実際に参加したボランティアの内容・経験した事柄等を記録するよう求めた。

学外実習では，実習施設や参加する講座を学生が選択する。そのため，学内実習のようには学生を組織せず，実習施設，もしくは参加する講座単位で学生の責任者を決め，授業担当者との連絡・調整を行っている。学生には，連絡網を作成するよう求め，授業担当者に提出するとともに，実習ノートに添付し，学生同士あるいは授業担当者と学生間で連絡がスムーズに行えるよう工夫した。

学外実習は，学外での実習が主となるため，学生との連絡・調整は特に密に行った。実習ノートの利用，連絡網の作成以外に行った工夫は，時間割内に授業時間を確保したことである。学内実習の項でも述べたが，時間割内に「こども学フィールドワークⅡ」の時間を可能な限り多く設定した。この時間は，学内実習・学外実習双方に関する事柄を取扱うようにし，必要な手続きについて説明・確認を行い，学生への伝達を行うことができた。

学外におけるボランティアの実施状況は，表2－１，2－2のとおりである。また，ボランティア研修のスケジュールを資料１に示す。

平成23年度の学外ボランティア実施状況

表2−1　国立大隅青少年自然の家

	実施日	会場	参加者
ボランティア養成研修	6/4(土)	鹿児島純心女子短期大学	一般　4人 本学学生　42人
	6/11(土)〜6/12(日)	国立大隅青少年自然の家	同上

表2−2　生命と環境の学習館

	実施日	会場	参加者
基礎研修	7／3(日)	生命と環境の学習館	本学学生　23人

「おおすみくん家」事業ボランティア参加日程表

	事業名（内容）	実施日	場所･会場	参加対象	参加学生
1	スポーツキャンプ（バレーボール編）	7／2(土)〜7／3(日)	鹿屋体育大学,国立大隅青少年自然の家	中学生	3人
2	南九州の自然探検隊①〜ジオパーグを知ろう〜	7／9(土)〜7／10(日)	国立大隅青少年自然の家	児童，保護者	3人
3	スターウォッチング	8／12(土)〜8／13(日)		親子，一般	5人
4	ファミリーキャンプ	8／20(土)〜8／21(日)		家族	4人
5	自然体験活動指導者養成研修	8／25(金)〜8／26(土)		18歳以上学校教育関係者他	5人
6	子ども生き生き体験学習	8／27(土)		大隅学舎の児童	4人
7	おおすみスポーツキャンプ〜柔道編〜	12／17(土)〜12／18(日)	鹿屋体育大学,国立大隅青少年自然の家	青少年	7人
8	MY凧　舞い上がれ！〜手作り凧を　大空に〜	12／17(土)〜12／18(日)	国立大隅青少年自然の家	家族	5人
9	山から君へのメッセージ　〜高隈山へのチャレンジ	12／25(日)〜12／28(水)	国立大隅青少年自然の家,高隈山	小学校5年生〜高校生	6人

ワークショプサポーター事業日程表

	講座名（内容）	実施日	参加学生
1	目指せ！チリモンマイスター	8／5(土)	1人
2	目指せ！チリモンマイスター	8／6(日)	2人
3	目指せ！チリモンマイスター	8／9(水)	2人
4	シェルアートでフォトフレーム作り	8／10(木)	2人
5	シェルアートでフォトフレーム作り	8／11(金)	2人
6	シェルアートでフォトフレーム作り	8／12(土)	2人
7	シェルアートでフォトフレーム作り	8／13(日)	2人
8	シェルアートでフォトフレーム作り	8／14(月)	2人
9	シェルアートでフォトフレーム作り	8／15(火)	2人
10	ペレットさんの大変身	8／20(日)	1人
11	ペレットさんの大変身	8／21(月)	1人
12	ふわりふわり〜花とことりのモビール作り	8／23(水)	1人
13	ふわりふわり〜花とことりのモビール作り	8／24(木)	1人
14	こどもエコクラブ交流会「川の源流体験」	8／26(土)	2人

場所・会場：1〜13は生命と環境の学習館，14は鹿児島大学高隈演習林
参加対象：1は幼児，一般，2〜14は小学生と親子

ボランティア研修　スケジュール　　　　資料1

国立大隅青少年自然の家

実施日	時間	内　　容
6月4日(土)	9：30	開講式「出会いのつどい」
	10：00	講義1「学校教育における体験活動の意義」 鹿児島大学　福満博隆氏
	11：30	昼食
	12：30	講義2「ボランティア活動のあり方」 鹿児島大学　福満博隆氏
	14：15	実習1「救急救命法」第十管区海上保安本部職員
	17：00	解散
6月11日(土)	9：30	講義3「青少年教育施設の現状と運営」 大隅青少年自然の家次長
	11：00	実習2「野外炊飯」(焼きそばを作って食べる) 大隅青少年自然の家職員
	13：30	実習3「海浜活動」 大隅青少年自然の家職員
	18：00	夕食
	19：00	実習4「キャンプファイヤー」 双葉保育園長　吉徳淳之介氏
	20：30	入浴
	22：00	就寝
6月12日(日)	6：00	起床・荷物整理・清掃
	7：30	朝食（レストラン）
	9：00	実習5「ハイキング活動」 大隅青少年自然の家職員 ※途中昼食（おにぎり弁当）
	14：00	講義4「青少年教育施設におけるボランティア活動の理解」 大隅青少年自然の家　事業推進係長
	15：00	まとめと振り返り
	15：15	閉講式「別れのつどい」
	15：30	解散

生命と環境の学習館

実施日	時間	内　　容
7月3日(日)	10：00	ガイダンス
	10：10	アイスブレイク
	11：10	自然体験プログラム
	11：30	生命と環境の学習館　展示解説
	12：00	昼食
	13：00	インタープリテーション体験
	15：00	「環境レター」 一次審査～対象者を知る～
	15：30	実習における諸注意
	16：00	解散

Ⅲ　平成23年度の授業の成果報告

授業後の振り返りは学生にとって大切な学びとなるが，こども学フィールドワークⅡでも，自分の実践を必ず振り返ることに重点をおいている。その振り返りをメンバーと共有したり，文章化したりするために，学内実習では「純心こども講座」での実習当日にその講座への取組みについて反省会を実施している。また，学内・学外実習ともに，学生一人ひとりに「学内実習ノート」「学外ボランティアノート」を配布し，「講座についての振り返り」や「活動記録」

を記入し，授業担当者に提出するように求めている。また，平成21（2009）年度からは，全ての学内･学外実習を終了した後,一定期間をおいてe-ラーニングシステム「Moodle」を利用した,新たな振り返りの機会を設けている。

本稿では，特に「Moodle」を利用した学生による自己評価，学外実習では実習先の評価も冨含めて平成23年度授業の成果や今後の課題について検討する。

1 「Moodle」を利用した自己評価の方法

平成24年1月19日の授業時間を使って，Moodleの利用の仕方について説明し，質問項目に回答するように求めた。対象は平成23年度こども学フィールドワークⅡ受講者64名である。64名中62名の回答があり，回答率は96.8%であった。

1）自己評価の項目

自己評価項目は，学内実習・学外実習それぞれについて作成した。

学内実習では，「事前準備の取組み状況」「当日の取り組み状況」「実施後の振り返り」等５つのカテゴリーからなる，平成21年度に用いた自己評価項目をそのまま利用した[6)]。

学外実習では，参加した活動（ボランティア）の名称，日程などの基礎情報に加えて，学外実習のねらいに基づいて「参加した活動・事業の内容，目的の理解」「対象者・スタッフとの関わりについて」「参加態度・意欲について」「実習記録の記入状況について」「実習記録・提出物の提出状況について」の５項目とした。また，自由記述欄を設け，学生が自分の言葉で自分の取組み状況について振り返ることができるようにした。

2）集計及び分析方法

「Moodle」のコンテンツにあるフィードバック機能（自己評価内容の提出，分析）を利用した。自己評価項目の一部で,「あてはまる～あてはまらない」等の順序尺度を利用した質問項目については，1点～ 5点の間隔尺度として扱い，PASWStatistics18.0を用いて基礎統計を行った。以下，結果と考察を学内実習と学外実習に分けて報告する。

2 学内実習に対する学生による自己評価の結果および考察

1）学生による自己評価の概要

⑴ 対象者について（回答率96.8%）

平成23年度のこども学フィールドワークⅡ（学内実習）では,「リズムあそび」「いろとあそぼう・かたちとあそぼう」のいずれか一つの講座で実習を行った。講座別の学生数は表3のとおりである。

表３　講座別学生数

講座名	人数	%
リズムあそび	30	46.9
いろとあそぼう・かたちとあそぼう	34	53.1
合計	64	100

⑵　自己評価の平均得点の変化

学内実習では，実習毎に取組みについて振り返るよう求めている。自己評価得点は，学生が自分の取組み状況を50点満点で評価したもので，実習直後に実習ノートに記載された自己評価をそのまま入力するよう求めた。各実習の自己評価得点の平均は表4に示す。表4および図8より，実習回数を重ねる毎に自己評価得点の平均点は上昇した。

表４　自己評価得点の平均

	1回目	2回目	3回目	4回目
平均値	28.06	32.79	35.42	40.56
最大値	49	48	50	50
最小値	5	10	10	0

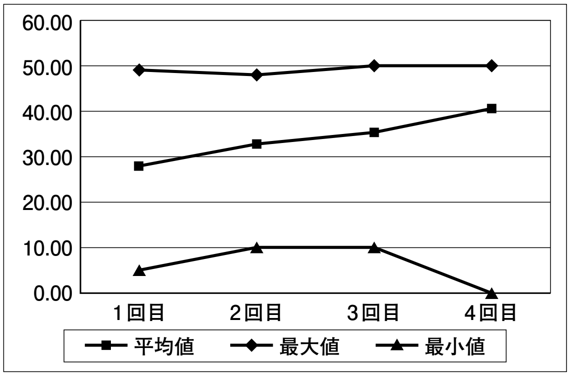

図8　自己評価得点の平均

⑶　自己評価項目別の平均得点と標準偏差

自己評価項目別の平均得点と標準偏差を算出し，表5に示す。

表5　自己評価項目別の平均得点と標準偏差

	評価項目	平均得点	標準偏差	最小値	最大値
事前準備	係の仕事内容をきちんと把握できた	4.45	.53	3	5
	係の仕事に責任を持って取り組んだ	4.66	.51	3	5
	事前の話し合いや打ち合わせに積極的に参加した	4.60	.53	3	5
	係の仕事をする上で工夫をした	4.16	.63	3	5
	同じ係のメンバーと協力して準備を進めた	4.79	.41	4	5
	見通しを持って係の仕事に取り組んだ	4.11	.79	2	5
当日の取組み	子どもと接するのにふさわしい格好だった	4.82	.46	3	5
	子どもやその親に接するのにふさわしい態度だった	4.53	.59	3	5
	当日の流れや動きを把握していた	4.08	.64	2	5
	当日の流れに合わせて自分から行動した	4.21	.77	2	5
	当日の係の仕事に責任を持って取り組んだ	4.65	.52	3	5
	子どもと積極的に関わった	4.66	.57	2	5
	子どもの保護者と積極的に関わった	3.74	.85	2	5
実施後の振り返り	自分の取組みを客観的に見直した	4.35	.68	3	5
	反省会（振り返り）の内容を次回に生かす努力をした	4.65	.52	3	5
	次回の講座では，反省会（振り返り）の内容を生かした実践ができた	4.37	.58	3	5
その他	ノートは丁寧にわかりやすく書いた	4.05	.84	2	5
	こども講座全体を通しての自己評価	4.29	.49	3	5

ア　全体的な傾向

表5に示した18項目中，自己評価項目ごとの平均得点は4.82～3.74点となり，最も平均得点の高かった項目と最も平均得点の低かった項目の差は1.08点となった。当日の取組みに関する評価項目で「子どもの保護者と積極的に関わった」の3.47点を除いて，どの項目も4点台の評価となった。

イ　平均得点が高い項目について

自己評価項目のうち，平均得点が特に高かったものは以下の項目である。

・子どもと接するのにふさわしい格好だった　平均得点　4.82　標準偏差　0.46
・同じ係のメンバーと協力して準備を進めた　平均得点　4.79　標準偏差　0.41
・係の仕事に責任を持って取組んだ　平均得点　4.66　標準偏差　0.51
・子どもと積極的に関わった　平均得点　4.66　標準偏差　0.57

これらの項目には，「事前の取り組み状況」1項目，「当日の取り組み状況」3項目が含まれており，最も平均得点が高かった項目は，「当日の取り組み状況」についての評価項目であった。

ウ　平均得点が低い項目について

自己評価項目のうち，平均得点が特に低かったものは，以下の項目である。

・子どもの保護者と積極的に関わった　平均得点　3.74　標準偏差　0.85
・ノートは丁寧に分かりやすく書いた　平均得点　4.05　標準偏差　0.84
・当日の流れや動きを把握していた　平均得点　4.08　標準偏差　0.64

「ノートは丁寧にわかりやすく書いた」は，「その他」に，他の2項項目は「当日の取組み状況」に関する評価項目である。「当日の取り組み状況」に関する自己評価項目は7項目あり，上記の2項目と「当日の流れに合わせて自分から行動した」を加えた3項目の平均得点は4.3点以下となった。

エ　標準偏差が大きいもの

標準偏差の値が大きいものは，以下のとおりである。

・子どもの保護者と積極的に関わった　平均得点　3.74　標準偏差　0.85
・ノートは丁寧に分かりやすく書いた　平均得点　4.05　標準偏差　0.84
・見通しを持って係の仕事に取組んだ　平均得点　4.11　標準偏差　0.79
・当日の流れに合わせて自分から行動した　平均得点　4.21　標準偏差　0.77

これらの項目は他の自己評価項目に比べ，標準偏差のポイントが高かった。また「ノートは丁寧に分かりやすく書いた」を除く3項目は，「当日の取組み状況」のカテゴリーに属する項目である。

⑷　学内実習の学生による自己評価に対する考察

まず，自己評価得点の変化から，過年度の実践と同様に「純心こども講座」での実習を重ねるごとに平均得点が上昇する傾向が見られた。実習回数を重ねることで，講座に参加している子どもたちやその親の方々との関係が深まり，講座への意識も高まったようだ。

また，自己評価得点の最低点が0点の回があるが，実習毎に記入する自己評価得点を

記入していない回があり，未記入を0点と入力したものと考えられる。提出された実習ノートは授業担当者が記入状況を確認し，未記入の項目は次回までに記入するよう学生に指導してきたが，徹底されていなかったようだ。今後は，未記入事項について指摘するばかりではなく，分かりやすく示したり，再提出期限を設けて記入を徹底させたりする等の工夫を考えていきたい。

次に，自己評価項目ごとの平均得点と標準偏差から，自己評価得項目のうち平均点が4.3点未満の項目は，学生の自己評価にばらつきがみられる。特に注目したいのは，「事前準備」の中の「見通しを持って係の仕事に取組んだ」1項目と，「当日の取組み」に関する自己評価項目群の「当日の流れや動きを把握していた」「当日の流れに合わせて自分から行動した」「子どもの保護者と積極的に関わった」の3項目である。平成23年度は2グループ制をとり，講座の内容を企画する講座係と，会場の環境構成や参加者用の名札・参加賞等を担当する係（以下会場係とする）に位置づけて企画・準備・運営を行った。2グループ制を採用するにあたり，グループ間での情報共有が十分に図られない可能性があることを想定し，授業では必ずお互いのグループの進捗状況の確認や情報交換を行うよう指導してきたが，結果としてはその時間が十分に活用されなかった。

実際の授業でも，「2グループで1つの講座を担当する」ため，講座は講座係，会場は会場係での活動が中心になり，グループを越えて意見を出し合ったり，助言をしたりすることは少なかった。例えば，「純心こども講座」のリハーサル場面でも，講座係の学生がリハーサル中に，会場係の学生は会場の飾りつけや参加賞の仕上げ，名札の作成に熱中していることもあった。2つのグループが別々の行動をとり，お互いの講座の流れが把握できないままに講座当日を迎えたことで，前述の「見通しを持って係の仕事に取組んだ」「当日の流れや動きを把握していた」「当日の流れに合わせて自分から行動した」の項目に対する自己評価が低くなる学生がいたことは，当然である。

最後に，「子どもの保護者と積極的に関わった」の自己評価得点が低くなったが，これは，保護者との関わりを難しいと感じる学生がいたということを示している。学内実習は自己課題に気付く場でもあるので，今後も学生が自己課題に気付く場として機能させるとともに，2年間で学内その課題を解決できるようサポートしていきたい。

3　学外実習における評価の結果および考察

ここでは学生による自己評価および実習先からの評価について述べる。

1）学生による自己評価の概要

⑴　対象者

国立大隅青少年自然の家，生命と環境の学習館のいずれかを選択し，ボランティア研修に参加した上で実習を行った（表6)。23年度は1名が両方に参加したため，総数は65人となっている。

表6　実習先別学生数

実習施設名	人数	%
国立大隅青少年自然の家	42	64.6
生命と環境の学習館	23	35.4
合計	65	100

⑵　学生の自己評価（表7）（回答率96.9%）

自己評価の回答は全体に高いことが示される。⑴「参加した事業の内容,目的等の理解」では，実習施設，及び各講座の事前事後の入念な指導と学生の関心を示すものと考える。⑵⑶については子どもやその家族を含めた子どもを取り巻く環境についての学びへの関心，意欲をもって経験できたものと考える。⑷「実習記録の記入状況」については「とても評価できる」の数値が顕著に低いが⑸の実習記録の提出状況は逆に高く，大きな差異が見られる。

表７　学生の自己評価 5項目の結果　　n ＝62　　人（%）

⑴参加した事業の内容，目的等の理解	積極的に取組めた	取組めた	積極的に取組めなかった
	49(79.0)	13(21.0)	0(0)
⑵対象者・スタッフとの関わり	積極的に取組めた	取組めた	積極的に取組めなかった
	40(64.5)	22(35.5)	0(0)
⑶参加意欲・態度	積極的に取組めた	取組めた	積極的に取組めなかった
	48(77.4)	13(21.0)	1(1.6)
⑷実習記録の記入状況	とても評価できる	評価できる	評価できない
	14(22.6)	40(64.5)	8(12.9)
⑸実習記録の提出状況	毎回期日に提出した	少々遅れた	遅れた
	47(75.8)	13(21.0)	2(3.2)

⑶　学生の自由記述

学外実習で①印象に残ったこと，②どのような学びがあったか，③どのような課題が見つかったか,④その他（自由に）の記述から同類のものを収束し,以下の6つカテゴリー「自然体験」「活動中の子どもの様子」「子どもやその家族との関わり」「スタッフとの関わり」「実習生としての自分の立場」「課題」に分類し，代表的なセンテンスの抜粋を挙げた。（表8）

実習先の2つの施設は，自然体験プログラムとなっているため，それぞれの実習で，学生は自然をとおした感動体験と感性を持つことの重要性を実感し,「印象に残った」という記述が多く見られる。それぞれの実習で自分の実際行った活動において，子どもの発想力の豊かさや新しい発見をし，子どもやその家族に触れ，またスタッフの子どもに対する関わりを観察し得た学びや印象を通して，保護者支援の一方法への理解と幼稚園，保育園実習に対する意欲につなげている様子が見られた。こども学フィールドワークⅡのねらいである「体験的学びをとおして,子どもやその親を含めた子どもを取り巻く環境」についての学びを深めたと考えられる。またボランティアに対する消極的なイメージから意識の変化，自己の成長についての記述，課題として，もっと積極的に関わ

表8　自由記述より　※学生の自由記述より抜粋して引用した。本文は原文のまま。

項　目	内　容
自然について	・朝3時に起床して，道なき道をロープを使って登り真っ暗な道を登ったことは初めての体験だったが，16時間の登山で見た景色，植物，すべてがいい思い出となった。 ・自然の厳しさを知り，冬の山登りをする中で絆を深めていくことが印象的だった。最初は緊張して互いに話し出すこともなかった子ども達が次第にまとまりをみせるようになり，協力して野外炊飯や登山をする姿に感動した。 ・チリメンができる過程を子どもたちと一緒に学ぶことができ，鹿児島の自然について深めることができた。 ・今まで流れ星を見たことがなかったのでたくさんの流れ星を見れたことや屋上で寝転んで星を見るのも初めてだったのでとてもきれいな星に感動した。
活動中の子どもの様子について	・子どもたちは，すごくキラキラした顔で貝殻で思い思いのフォトフレームを作っていたのが印象にある。みんな材料は同じなのに出来上がったら一人ひとりの個性が出ていてすごいなと思った。子どもたちの個性を大切にしていくことを学んだ。 ・こども達は発想力がとても豊かである。それぞれが作る作品はひとつひとつ個性や性格がでていてとてもおもしろかった。作り方や材料の選び方などもみんな違っていた。作っているときも時間をかけて丁寧に作る子や，あまり時間をかけずに作っている子などさまざまなこどもたちを見ることができたことも学びにつながったと思う。 ・野外炊飯やハイキングは，楽しいながらも危険がたくさんあった。活動の始めに，注意して取り組むように言われても，子どもはははしゃいで危険があることを忘れていることもあるため，その都度発見したら注意することが大切だとわかった。
子どもと家族との関わりについて	・凧作りをするとき，家族で協力して一生懸命凧を作る姿がすばらしいなぁと思った。夜の自由活動の時も自主的に製作に取り組む子どもや大人の姿が見られた。凧が完成して外に上げるときは高く高く凧が上がって親子がとても感動している様子が見られた。 ・餅つきのときも親子でもちをつき，笑顔で餅をおいしそうに食べている様子が印象的だった。 ・ファミリーキャンプでは川遊びやそうめん流しなどさまざまなことを子どもとだけではなく，保護者の方々とも一緒に楽しむことができた。特に印象に残っていることは川遊びです。前日に雨が降り川が少し荒れていたけど，職員の方々や保護者の方々と子どもたちが安全に通ることができる道を作ったり，流れの速いところ気を配ったりして安全に過ごすことができた。
スタッフとの関わりについて	・初対面のこども達に対するスタッフの方々の心遣いで…緊張しているこども達にスタッフの方々は，自分にあだなをつけて「○○って呼んでね」とか，「今日はどこから来たの？」などと場の雰囲気を和ませていた。すると，次第にこども達の表情も豊かになり，こども達の方から話しかけ，生き生きと活動に参加していた。その一瞬にして緊張を溶かすことのできたスタッフの方々の姿がとても印象的だった。 ・スタッフは見えている部分だけでなく裏でとても動いていることを自分が実際にスタッフとして仕事をして改めて感じた。 ・こども達に声をかけるだけでなく，保護者の方にも声をかけることも大切だよとアドバイスをいただいた。
実習者としての立場について	・危険を予測し危険を防ぐこと，そのための観察力をつけなければいけないと思った。 ・周りを見て行動することが足りないことを感じた。 ・参加者が安全に有意義に過ごせるように隅々にまで気を配る大切さを学んだ。沢登は体力がいり，子どもたちの安全を守るという責任ある体験だった。子どもたちと協力し，達成できたことで精神的にも体力的にも成長できた。 ・すべてを手伝うのではなく作りたくなるような声掛けをしたり年齢に応じた援助を行うこと。 ・子どもたちが過ごしやすい環境づくりをうまくすること，子どもたちより先に動き，迷わないように配慮することが大切だと学んだ。
課題	・もっとこども達と積極的に関わること。簡単なようにみえて，すごく難しいことだった。スタッフの方からリラックスして笑顔でいればこども達も安心するから，笑顔で積極的に関わったらいいよとアドバイスをいただいた。 ・子どもの気持ちはころころ変わるので，それを見逃さないことが大切だと感じた。また，子どもの話はきちんと聞いて，安心感を持ってもらうことも大事だと思った。 ・こどもが困っているときにすぐに対応できるように，しっかりと自分自身のことをした上で，援助に入るということの大変さを感じた。山登りは自分のこともしながら，子どもたちの様子もしっかりと見ていなければならない。周囲をしっかりと見る力が今後必要だと思った。 ・保護者と積極的に関わるためにコミュニケーション能力を身に付ける必要があると思った。

る必要性，子どもたちを安全に楽しく活動させるための支援法，コミュニケーションを図ることなどが挙げられる。

2)　実習先の評価

国立大隅青少年自然の家の同意を得て，3項目3尺度（Moodleの(1)〜(3)と同様の項目）と学生の要望や意見を忌憚なく記述できるよう総合所見を依頼した（資料2)。生命と環境の学習館は「学生ワークショップ事業実施報告書」と学生の振り返りシートのコメントをいただいた。

(1)　国立大隅青少年自然の家

国立大隅青少年自然の家ボランティア評価表　　　　資料2

鹿児島純心女子短期大学　　生活学科こども学専攻
1年　　No.　　　　　氏名
指導者（担当者）
事業名
実施日　平成23年　　月　　日　〜　　月　　日

	A積極的に取組めた	B取組めた	C積極的に取組めなかった
①活動・事業・内容の理解			
②対象者・スタッフとの関わり			
③参加意欲・態度			

総合所見

表9　国立大隅青少年自然の家の評価

人数（%）

	A積極的に取組めた	B取組めた	C積極的に取組めなかった
①活動・事業・内容の理解	29(69.0)	13(31.0)	0
②対象者・スタッフとの関わり	25(59.5)	17(40.5)	0
③参加意欲・態度	38(90.5)	4(9.5)	0

表9に示した①〜③の3項目についてＡＢ合わせて全員が取組めたという高い評価を得た。学生の自己評価の結果表7(1)(2)(3)と合わせ，学外ボランティアのねらいである「施設の実施する事業，講座の理解をとおして子どもやその家族に関わる体験的学び」についておおむね評価できたようである。

次に総合所見については，資料2　国立大隅青少年自然の家ボランティア評価表に記述されたものより抜粋して述べる。

「事業の活動目的と運営補助として参加者の誘導（入浴の世話，就寝用シーツの配布，起床，子どもたちへの安全確保）など，ボランティアとして与えられた仕事については，責任を持ってきちんとやり遂げることができた」「参加者に対しても明るい笑顔で関わった」「プログラムをサポートする姿が多く見られた」「事業全般において大変良くがんばった」と実習に対する姿勢，参加者との関わり，意欲を評価される一方，「野外活動が苦手なようで川遊びで川に入ることを怖がっていた」と具体的な指摘もあった。

⑵　生命と環境の学習館

「学生ワークショップ事業実施報告書」より抜粋して述べる。

「初めのうちはどう動いて良いのか，子どもや保護者にどう接すればいいのか戸惑っている様子も見受けられたが，スタッフと言葉を交わしながら，一つひとつ自分の課題をクリアしようとしていた」「一日の中でもスタッフとしての動きを習得している様子」「全体的に非常に真面目に取り組んでいる様子が見られた」と上述と同様に肯定的な評価を受ける一方で，「もう少し積極性を持って取り組んでほしいとも感じた」「自ら少し高い課題を自分に課し，それにチャレンジする気持ちで取り組むと，より良い気づきがあるのではないかと思う」と言った指摘もあった。

「積極性」については個人差があるものの，学生の自由記述（表8）にも多く見られた「課題」の回答とも重複しており，今後の指導課題の一つと考えられる。

⑶　学外実習の成果と課題

これまで学生による自己評価と実習先の評価について触れてきた。2つの実習先からは学生のマイナス面についての記述をあまりしない傾向が伺えるが，両者をとおして学外実習の成果と課題をまとめてみたい。

①　学外実習は，自然体験プログラムにおいて「子どもやその家族に触れ」ながら「スタッフに直接アドバイスを受け」，「子どもとスタッフとの関わり」を観察する中で，事業・講座の趣旨にそって子どもやその家族理解の「体験的学び」を拡げ，深めることができる。学生も多数が「良い経験」ができたと率直に記述しており，これらの経験をとおしておおむね，この授業のねらいを達成できたものと考える。

②「実習記録ノート」は，学内実習に比べて実習日程が多岐にわたっているため実習終了後各自で振り返り，記録をすることになる。学生の自己評価からも個人差が見られるが，「活動内容」「実習生としての自分」「スタッフの動き」などを自ら進んで記録し，より客観的な自己評価を行い今後につなげていけるものとしたい。

③　評価について,自己評価は5項目の3尺度と自由記述であり，実習先「国立大隅青少年自然の家」は3項目3尺度と総合評価,「生命と環境の学習館」は「学生ワークショップ事業実施報告書」の総合評価と学生の振り返りシートのコメントによるものである。学外実習（ボランティア）は施設の事業に委託し，学内実習や幼稚園，保育園実習と異なり，1回のみの実習である。実習施設の負担を配慮しながら，実習施設と今後も連携を図り，評価方法検討の必要もある。

④　学生が今後の課題とした「積極性について」「保護者との関わり」の難しさ，「適切な言葉掛け」ができない，「とっさの場合の気働き」ができないといったものが挙げ

られるが，これらは「純心こども講座」との連携した取組みも検討できるものと考える。
　今後も子どもやその家族に触れるという特性の中で学生の反応や興味，関心を重視し，このようなボランティア活動への機会を支援していきたいと思う。

おわりに

　こども学フィールドワークⅡは，学生の主体的・体験的な学びを重視した授業で，学内実習と学外実習で構成されている。今回，授業実践の内容について学内・学外実習双方の視点から振り返ることにより，学内・学外と実習の場や学生が経験する実習の回数は異なっても，学生の自己評価からは共通した課題が見出された。特に，「保護者との関わり」「適切なことばかけ」「とっさの場面での気働き」などの課題は，保育者を目指す学生たちにとって，幼稚園・保育所等での実習や就職後にも直面する課題であり，こども学フィールドワークⅡの授業担当者はもちろんのこと，養成に携わる教員が連携し合いながら今後解決していく課題である。このように授業担当者自身が授業実践を振り返り，学生が現在もしくは今後抱える可能性のある課題を見出し，そのことを意識しながら授業を展開していくことで，学生が早い段階で自己課題に気づけるようサポートしていけるものと考える。また，学生の姿にあった授業展開を行うことができ，保育の質についての議論が高まり，質の高い保育者養成が求められる今日，より効果的な授業展開に結びついていくのではないだろうか。
　最後にこの授業は，多くの方々のご理解とご協力により成立している。「純心こども講座」において学生が実習する事を快諾していただけるだけでなく，「お姉さん先生」として成長を楽しみにしてくださっている地域の方々，国立大隅青少年自然の家，生命と環境の学習館のスタッフの皆様，江角学びの交流センターのスタッフをはじめ，こども学フィールドワークⅡの授業の関わってくださいました全ての方に心よりお礼を申し上げたい。

註

1)　これまでの授業実践の報告は，以下のとおり。
平山・井上（森木）（2003）（2004）（2005）「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第1報～第3報」『こども学研究　こども発達臨床センター紀要』，第１号～第3号，鹿児島純心女子大学大学院・大学・短期大学こども発達臨床センター
永松・餅原（2006）「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第4報」『こども学研究　こども発達臨床センター紀要』，第4号，鹿児島純心女子大学大学院・大学・短期大学こども発達臨床センター
森木（2007）（2008）「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第5報～第6報」『こども学研究　こども発達臨床センター紀要』，第5号～第6号，鹿児島純心女子短期大学大学院・大学・短期大学こども発達臨床センター
森木（2011）「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第7報」『鹿児島純心女子短期大学紀要』，第41号，鹿児島純心女子短期大学

2）「平成23年度　こども学フィールドワークⅡ　学内実習ノート」p.2
こども学フィールドワークⅡでは,授業についての説明や,授業の進め方を示した実習ノートを配付している。図表１～は，学生に実際に配布した実習ノートの一部である。図中に「こども講座」と記されているが，正しくは「純心こども講座」である。

3）同上の「実習ノート」 p.2　図中に「こども講座」とあるが，正しくは「純心こども講座」である。

4）こども学フィールドワークⅡは「純心こども講座」を実習の場としており，土曜日（時間割外）の実施となる。時間割には，週1回「こども学フィールドワークⅠ・Ⅱ」が組まれているため，こども学フィールドワークⅠの担当者と調整を行い，可能な場合には時間割内にも授業を実施した。時間割内で実施した授業では，毎時間20 ～ 30分程度，学内実習だけでなく，学外実習に関する事柄についても取扱った。平成23年度は，従来も確保されていた全体でのオリエンテーション・まとめの時間以外に5回の時間を確保した。

5）「平成23年度こども学フィールドワークⅡ学外ボランティアノート」p.4

6）自己評価項目の詳細は，森木(2011)「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第7報」『鹿児島純心女子短期大学紀要』，第41号，鹿児島純心女子短期大学，p114で報告したとおり。

参考文献

1　平山・井上（森木）(2003)（2004)（2005)「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第1報～第3報」『こども学研究　こども発達臨床センター紀要』,第1号～第3号，1-20，1-22，1-19

2　森木（2007)（2008)「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第5報～第6報」『こども学研究　こども発達臨床センター紀要』，第5号～第6号，1-13，1-15

3　森木（2011)「こども学フィールドワークⅠの授業実践報告（学内実習）第7報」鹿児島純心女子短期大学紀要，第41号，107-121